

(04.06.20)

劇場映画「白い巨塔」を見た

高部英明

(本原稿はレーザー研所内版のために書いたものである)

違います。昭和41年に制作された田宮二郎主演のモノクロの映画作品です。監督はあの山本薩夫。この映画作品の後、田宮二郎主演のテレビドラマが始まり、40年経った昨年、唐沢主演のテレビドラマが再度制作された。

山崎豊子の作品は骨太です。以前入院した時、時間をもてあました病院で「大地の子」を見て興味を持ち、原作を読んだのが始まりでした。退院後、「大地の子」を小説で読み、一気に読み切ったばかりに、体調がまた悪くなったのを良く覚えている。その後、「二つの祖国」、そして、「沈まぬ太陽」。「沈まぬ太陽」を読んだからは日本航空には一切乗るか、国内線は日本エアーシステムを使っていたのに、それが、JALに吸収合併してしまい、仕方なくマイレージの関係でJALとおつきあいするようになってしまった。最近は拒絶反応も薄れてしまったが。

「白い巨塔」はずいぶん古い小説なので、読む機会を逃していたと云うのが実情。高校時代にテレビで放映されていて、学校で話題になったことがある。ところが、昨年、テレビでリメイクの番組として再登場したと聞いて、本屋に無造作に積み重なっていた文庫本を買った。1巻2巻を同時に買ったが、すぐ後で、全巻そろってしまった。これも一気に読んでしまった。

今日(6/19)、よく利用する近所のビデオレンタルで「白い巨塔」を見つけた。田宮二郎主演と書いているので、てっきりビデオの再録で、何巻もあるのだろうと思ったら、違う。テレビ版では真理・誠実の研究者、里見助教授は山本学であったのに、田村高廣になっている。よく見ると、150分の劇場映画とのこと。借りた。そして、その夜、見ました。このパソコンで。

内容を知らない人のために、概要を。財前五郎（田宮二郎）が主人公。彼は旧帝國大学である浪速大学医学部の第1外科の助教授。第1外科の教授は東京の国立東都大学出身で16年前に浪速大学の教授として赴任してきた東教授（東野栄治郎）。東教授が来年3月に退官することによる次期教授の選考が話の舞台となる。財前は噴門癌の手術では日本一。天性の感と芸術的なメス裁きはサンデー毎日の巻頭グラビヤで紹介されるまでに有名である。

(何故、サンデー毎日かと思っていたら、白い巨塔はサンデー毎日に連載された作品であることに気づいた)。去りゆく東教授としては自分に許可無くグラビヤを飾るなど、既に眼中に東教授などない財前が忌々しい限り。

「あんな人間的に不遜な男に、伝統と権威のある浪速大学第一外科の教授を継がせる訳にはいかない」と、感情的な判断が、東都大学という日本の最高権威の医学部教授の船井氏に「浪速大学の閥の強い医局に、私が何とか東都大学の位置を築きあげました。後任には東都大学出身の研究、人物に優れた人材を推薦して頂きたい」言わせてしまった。ここからが教授人事を巡っての大立ち回り。後に引けなくなる。

船井教授は金沢大学（東大、京大、阪大以外は実名になるのが怖い。出てくるのは「東北大学」、「岡山大学」、「和歌山大学」など。参考までに京大は「洛北大学」となっている）の菊川教授（船越英二）を推薦。菊川教授が独り身とわかり、東教授は行きそびれた娘（藤村志保）の婿にという妻の言葉に肩入れしてしまう。6名の教授による教授選考委員会で「学内選考か、公募か」が議論される。正義を絵に描いたような基礎の大河内教授（滝沢修）の公募票で、公募で決めることとなった。

公募してきたのは17人。内、7名を書類選考し、教授会にかけた。浪速大学医学部の教授は臨床が15名、基礎が16名、最終的に合計31名の投票で決める。結局、3名の候補に絞られる。菊川と葛西徳島大学教授と財前。葛西は財前の6才上で、葛西が浪速大学助教授から徳島大学教授に赴任したことで財前が助教授になったといういきさつがある。これには、教授会民主化を標榜する（実はかなり狸の）野坂教授（小沢栄太郎）が絡んでいる。

教授会でそわそわする中、財前には先日、噴門癌の手術をした患者がいた。彼は術後しばらくして高熱を出して、結局、癌性肺炎で死ぬ。財前には患者どころではない。財前の教授という「金看板」を何よりも望む義父・財前産婦人科院長。金に糸目を付けず、多数派工作に荷担する。「選挙は水物」と、念にも念を入れ、票読みをする。それを支援する大阪医師会の会長（義父の財前は副会長）。

第1回の投票では票は財前12票、菊川11票、葛西7票と割れた。投票前に東教授が「私は前任の助教授の葛西君と財前君が骨肉合いはむような投票はできない。棄権させて頂く」と、大芝居を打って、財前票を残り2名に流す工作をするという場面もある。結局、過半数なしで、決選投票は上位2名で一週間後の教授会。

この一週間が何とも醜い人間模様。葛西の7票を掴むために野坂教授に、財前の親父は実

弾戦術（一票、10万円、締めて70万円を野坂教授に渡す。原作の時代、サラリーマンの初任給は1万円程度）。財前の親父は「相手が東都大学の政治力なら、こっちは金と行動力あるのみ」と。一方、菊川派は、東都大学の船井教授を通じて、「野坂先生には日本整形医学会の理事のポストが1つあいていますから、理事のポストを。末は会長、日本学術会議会員ですよ」とのポスト攻撃。

そんな様子を知った財前の医局の主立ったメンバーが「財前が教授になればそれぞれが1階級ずつ出世する」と、金沢に出かけ、菊川に「辞退してください」と陳情に出向く。しかし、菊川は拒否。これを電話で聞いた船井は空路、大阪へ。「菊川君が敗れては私のメンツに関わる」と、核兵器攻撃(?)。つまり、「野坂君の仲間のA教授は大きな研究費を申請していましたね。私が通しましょう。B教授は厚生省の何々委員会の委員になって頂きましょう。C教授は新薬を申請とか。私は新薬認可の審議会委員ですから委員会で応援演説をしましょう」という具合。

白い巨塔の新装なった文庫版の帯に、作者の山崎豊子がかいていた「40年経った今も、大学の医学部が旧態然としたままであることを聞くに及び、この本が少しでも大学内の体質の改善に。。。」のようなことを。知り合いの医者に聞きました。「まだ、『ジツ』(縄張り。人事権を行使できる近隣の大学のポストなどを指す)という言葉は使われているのでしょうか」と。「はいあります。特に第一外科などは『あそこは俺たちのジツダ』、などといえますね」。

医学部長の鶴飼教授は財前を支持。医師会の会長が浪速大学の同級生で、「大阪医師会は鶴飼教授の浪速大学学長選を全面的に応援しますよ」の言葉に転がった。書き出すときりがない。「水物」の教授選を義父の実弾攻撃などで辛くも16対14で征したものの、術後、急死した患者の遺族から教授に就任したばかりの財前が裁判に訴えられると、話は続く。小説ではこの裁判がこと細かく描かれているが、テレビでは短い。

教授人事の裏をビデオで見ながら、レーザー研の教授懇談会の様子を思い出して、苦笑いしてしまった。実弾は飛ばないまでも(知らないところで飛んでいるのかな。核兵器も)、狸も狐も愚か者も色々いて(当然、実直な正義漢もいますよ)、時代が40年も違うのに、人間って何でこんなに愚かしい存在なのだろう、と泣けて来るといふか、あほらしいといふか、無力感を伴う複雑な感慨を、12時を回った土曜の深夜に味わった。

この時代になって、医学部でもないのに、学術会議の委員になりたいがために、恥ずかしげもなく弟子や知り合いに票集めをお願いして、組織票で委員になる退官教授もいる。その音頭を取る弟子の感覚が私には理解できない。朱に交われば赤くなる、で、長い間の

どろどろの世界の中で、若かりし頃の学問への誠実さなどカビが生えてしまったのだろう。それが、日本の物理学の世界の常識から隔離されてきた核融合というガラパゴス社会の現実です。今は、東大の吉田さんが物理学会の領域代表で、真に学術を議論するアカデミアに変えようとしています。世の中、里見助教授のような学術にも人生にも真実を求める人間が40年前に比べれば、少しは多く見かけることが出来るようになってきた気がする。遅々とはあるが、私にも息のできる社会に成熟しつつあるような気がする（そう願いたい）。

映画は財前が教授に就任し、裁判にも勝って、医学部病院の廊下を殿様行列よろしく「財前教授の総回診」という声に、田宮を先頭に昇格した医局の連中やインターンが白衣を着て歩く姿で終わる。同時に、里見は鵜飼学部長の山陰大学教授への辞令を握り潰し、辞職願を書いて浪速大学医学部がある中之島を去るシーンでおわる。

「これはおかしい。原作と結末が違う。これじゃ、悪が栄えるではないか」と憤りを感じたのは私だけだろうか。きっと、原作者もそうだったし、多くの映画を見た人も好悪反響は大きかったと思う。たぶん、それがテレビ版の田宮二郎の「白い巨塔」を作らせたのでは無かろうか。

田宮二郎は勝新太郎主演の「悪名」シリーズの勝新演じるヤクザ「八尾の朝吉」の子分の清次でなじみである。高校時代にテレビ映画でよく見た。結局、猟銃で口から脳天をぶち抜いて自殺してしまったが、財前ははまり役の悪を演出していた。

そんな気持ちでDVDを見ながら、皆さんも是非、田宮版「白い巨塔」を見てみては、と薦めたくなり、書いた次第です。

この映画のホームページがありました。参考まで。

<http://movie.goo.ne.jp/contents/movies/MOVCSTD4343/index.html>